

# 私立大学におけるゼミナール活動に参加する学生の学びのプロセスの質的研究

## —ゼミナール教育・研究における今後の課題と展望—

山田嘉徳

(関西大学大学院心理学研究科)

### 問題・目的

ゼミナール活動(以下、ゼミとする)および卒業論文(以下、卒論とする)指導に関する研究の少なさが指摘されている(毛利, 2004)。大規模私立大学における専門課程に位置づけられるゼミおよび卒論で学生がいかなる学びを成し遂げているのかを質的に明らかにする研究はほとんどみあたらない。特に、個々の大学の教育制度、文化的背景に基づき、ローカルなゼミ実践を「現場」からボトムアップに検討するようなアプローチ(溝上, 2002)に基づくゼミ研究はほとんどみられない。よって、本研究では、そうした社会・文化的な視点からローカルなゼミ実践の内実を質的に検討する調査を実施する。以上より、本研究は、第一に、ゼミ活動に参加する学生の多様な学びのプロセスを明らかにすることを目的とする。第二に、今後のゼミ教育・研究の示唆・提言をすることを旨とする。

### 方法

**フィールド** 本調査が対象とするフィールドは、関西大学文学部心理学専修に配当される3、4年次持ち上がり制の専門科目のゼミである。本専修には8つのゼミが設置されており、各ゼミの定員の上限は15名である。ゼミ配属は、2年次後期に志望順位表を提出させ、専門演習科目「心理学一般実験」の成績順で決定される。授業概要は、一般に、3年次では、グループ発表・討議、文献輪読などが行われており、4年次になると卒論活動が開始される。ゼミの中には、3、4年次生合同で実施するゼミもあり、本調査が対象とするゼミも合同ゼミであった。

表1で、本調査フィールドの授業概要を示す。特徴的な点として2つある。第一に、ペア制度を採用していることである。夏合宿に4年次生が卒論中間発表を行い、それを聞いた3年次生が4年次生を指名し、3、4年のペアをつくり、卒論作成・発表がペアで行われる。第二に、卒論をゼミの根幹においていることである。卒論テーマの選択に数か月かけて自我関与度の高いテーマを選択させる配慮がなされている。

**調査対象** 調査対象は、8名(男性3名、女性5名)のゼミ生であった。

**データ収集** データ収集は、半構造化

インタビュー法を用いた。インタビュー実施時期は、2008年4月、7月、12月であった。また、追加インタビューを2009年2月に行った。インタビュー項目は、ゼミ活動に対する意識・行動について尋ねる13の質問項目を用いた。

**分析手法** 本研究では、卒論作成活動に焦点を定め、学生の学びのプロセスを以下の3つ

表1 ゼミの年間授業計画概要

	合同ゼミ(3,4年次生)	卒論ゼミ(4年次生)
4月	3年次生によるゼミ発表	卒論テーマ決定
5月		
6月		
7月	ゼミ合宿(4年次生による卒論テーマ発表, ペア決定)	
9月	ゼミ発表(3,4年次ペアによる卒論合同中間発表)	卒論作成
10月		
11月		
12月	ゼミ合宿(3,4年次ペアによる卒論合同中間発表)	
1月	ゼミ総括	卒論提出

の分析により明らかにした。まず、(1)ゼミ生の参加の構造を明らかにするために、4月、7月、12月の3時点でのインタビューデータをもとに、参加パターンに該当する発言の有無で、参加の仕方と学びのプロセスの特性を抽出した。分析には、多重応答分析、クラスター分析を用いた。次に、(2)参加による学びの成果があらわれているデータから、学びのコミットメントの増加に着目し、それを学びの「促進化」として捉え、事例を抽出した。また、(3)参加パターンを軸に学びの「不成功」事例としての「離脱化」過程を分析した。ここでの、「離脱」とは、学びの非関与・無関心を示す。本分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2003)に基づき行った。

## 結果

### (1) クラスター分析、多重応答分析による参加パターンの類型化

クラスター分析、多重応答分析の結果、【調和】、【維持】、【妥協】の3つの参加パターンが見出せた。各パターンの定義は表2で示した。

表2 参加パターンの定義

【調和】：活動に正統性を見出し、自身の興味・関心と活動の意図・目的を調整しながら、活動に新たな意味・価値を見出して参加する参加パターン。
【維持】：活動に正統性を見出し、自身の興味・関心を持続させながら参加する参加パターン。
【妥協】：活動に正統性を見出せず、自身の興味・関心に妥協しながら参加する参加パターン。

### (2) 「参加の効果」からみた学びの「促進化」過程の事例検討

【調和】、【維持】のパターンからゼミ生の語りを事例として選択し、分析した結果、卒論作成への「正統性」の認知が学びの促進に有効に働いていることが明らかとなった。

### (3) 学びの「離脱化」過程の事例検討

【妥協】パターンを基に学びの離脱化モデルを作成し(図1)、学生が卒論作成から離れていく軌跡を具体的に明らかにした。

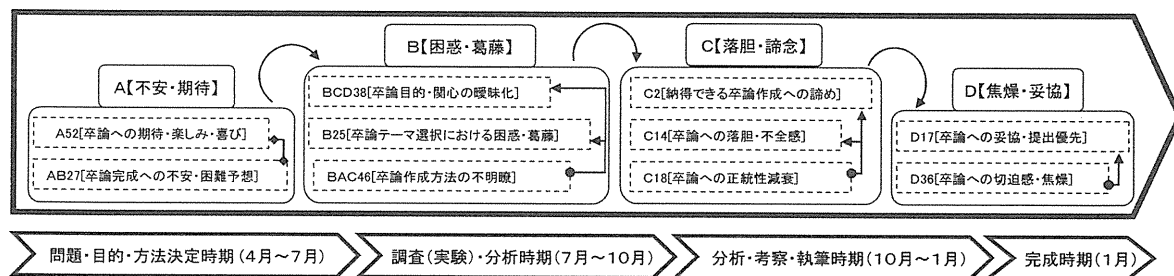


図1 卒論作成における離脱化過程  
図注1) 【 】 カテゴリー [ ] 概念(アルファベット・数字はデータに対応する) ●→ 一方影響関係 ←● 相互影響関係 ◆◆ 対立関係

## 考察・討論

本研究の結果から、ゼミ教育への提言・示唆として、学びの促進にむけて研究への自我関与をいかに設定するか、また、卒論・授業に「のれない」学生の学びのプロセスがいかに進行しているのか、これら両面に配慮したゼミ実践が必要になると考えられる。

ゼミ研究の展望・課題としては、ゼミの特性を整理し議論することがあげられる。たとえば、毛利(2007)は、一般教養ゼミ、プロゼミ、専門ゼミなどの類型分けが可能であるという。このように、ローカルなレベルで比較・検討できる視点をもつことが重要である。また、ゼミにおける教えー学びのプロセスを継続的に検討すること、ゼミ固有の分析方法を検討すること、学士課程の「質」保証とどう対応させるか等が今後の検討課題となる。